宙観がとって代わったものが中世以来の「単一の」宇宙観であることはきわめて疑わしいとせねばならない。ニュートンが「最後の錬金術師」であったことはさておくとしても。

（四六判　二六五頁　一九七七年一二月　白水社「ヘルメス叢書」4　二、二〇〇円）

（川島昭夫　京都大学大学院生）

ジュール・ミシュレ著
大野一郎訳
『民　衆』

ミシュレ（一七九八～一八七四）は『フランス革命史』のなかで、「この歴史にはひとりの英雄しかいない。すなわち、民衆である。」と述べているが、本書が上梓された一八四六年は、『フランス革命史』執筆の前年にあたり、民衆史家ミシュレ生誕の重要なエポックをなす時期である。

本書を貫く歴史観の特色は、民衆不在の歴史への反省・民衆史の復権にとどまらず、より積極的に、民衆を歴史の表舞台に主役として登場させたことにある。そして、その役回しは、「民衆の子として私は民衆と共に生きてきた。私は民衆を知っている。それは私自身なのだ。」（本書一五七頁）と自負するミシュレ本人をおいては誰もいない。

以下、本書の要点を述べる。

ミシュレは、十九世紀中葉のフランス社会を分析し、次のように概慨している。「フランスが刻々と下り坂になり、アトランティスのように沈んでゆくのが見えるではないか！」（三一頁）このようなフランスの凋落の根本原因は「機械主義」（＝機械万能）である。イギリス流に、政治・経済構造の近代的転換を図る過程で、フランス社会には何と精神の荒廃と人間不在が進行していることだろう。「機械主義の支配するところにあるのは祖国を欠いた国家である。技術や芸術を欠いた産業や文学である。検討を欠いた哲学である。人間を欠いた人類なのである。」（一四一頁）という痛烈な機械文明批判は、現代社会にも連なる人間疎外の問題を投げかけている。ミシュレによれば、この窮状を打開する道は、忘却のかなたにある民衆の復権をおいてはありえない。「民衆においても、地質学におけるのとまったく同様、熱は下の方にある。降りていきたまえ。熱が増大するのが見られるだろう。低い層において熱は燃え上がっている。」（一三四頁）冷酷な近代社会にあっても、下方では、地熱に喩えられる民衆の生活のヴィヴィッドな息吹きが感じられるのである。

それでは、一体、民衆とは何か。ミシュレは、民衆の属性について多くの言辞を費している。民衆とは、本能と行動の人であり、素朴で無垢な人であり、子供のような心の持主である。「子供は民衆を通訳する。」（一七二頁）とりわけ、「農民はフランスと合法的な婚姻で結ばれた。」（一三五頁）という表現から、中世以来の典型的農民「善人ジャック」を民衆の代表とみなすことができる。

しかし、ミシュレの民衆像はきわめて曖昧である。彼は基本的に、当時の社会をブルジョアと民衆の二大階級対立と捉えながら、一方では商工業者やブルジョアを民衆と同列視しているのである。すなわち、「ブルジョワジーが民衆より出て、その活

力とエネルギーによって高まり、そして突然の勝利のさなかに……」（一二一頁）と述べるミシュレには、ブルジョアと民衆が同じ根から分岐したのだとの意識がある。ただ、フランス革命後、半世紀のあいだに、ブルジョアは、機械主義に呑み込まれて、無気力で利己的な「光」の階級に変貌し、一方、民衆は相変らず無視され、軽蔑され続けて、「野蛮人」にとどまってはいたが、なおフランスの伝統に忠実で、情操豊かな「熱」の階級のままである。

ブルジョアと民衆が同根であることの最大の証拠は、両者が同じ陣営に属してフランス革命を戦い抜いたことである。「父たちは自分たちとフランスのために、献身と犠牲という独創性を守りつづけていた。」（二六二頁）とか、「世界中の注目をあびた未来を照らす燈台」（同頁）とフランス革命を絶賛するミシュレにおいて、フランス革命こそが、他国の追従を許さないフランスの崇高な理念と、歴史の完璧性・普遍性を現出させたのであり、この革命を成就させた民衆の内に、豊かな精神文明の結晶が見出されたのである。したがって、機械主義の悪弊を排し、フランス再生の道があるとすれば、フランス革命の原点に立帰って、フランスの価値を再認識することでなければならない。ミシュレは、民衆の出であるブルジョアが、民衆と同じ精神風土を享受することに希望をつないでいるのである。

しかし、このような民衆概念の曖昧さは、本書後半部を愛国主義一色で塗りつぶしてしまう原因となっていることは否めない。「祖国」、「愛国」、「天才」、「伝統」、「統一」、「犠牲」……と続く言葉は、「美し国フランス」的発想を逸脱した国粋主義の臭をもっている。「フランスの伝統は、中断されることのない、はてしない一続きの光であり、世界が常にそこにまなざしを注いでいる銀河なのである。」（二七一頁）などは、まさに中華思想的発想であって、異様な感じすら与える。さらに、「天才といわれる者と素朴な人々との、ひそかな血縁関係」（二〇〇頁）や、「民ノコエハ、神ノコエ」（二〇三頁）は、それぞれ、英雄待望論、民衆無謬論につながる危険な思想である。しかも、結局、本書では、民衆史への学問的方法論は示されずにおわってしまった。

けれども、このような批判をミシュレにあびせてもむだであろう。彼とて時代の子である。むしろ、産業革命以後、急テンポで展開される機械文明に対する精神の危機を逸早く看取したことに驚異の念を、また、圧殺されてゆく民衆に心底から愛情と共感を抱きつつ、民衆側から歴史を書きおこそうとした態度に畏敬の念を禁じえない。

本書冒頭の「この本は一冊の本以上のものである。私自身である。」（七頁）という言葉には、彼の並々ならぬ決意が窺われるし、直接、民衆を探訪した時のエピソードのうちには、マルク・ブロックのいう「食人鬼」を彷彿させるものがある。ともあれ、本書は民衆史の宣言の書であるといって過言ではあるまい。そして、このミシュレの民衆史は、約一世紀を経て、マルク・ブロックとリュシアン・フェーヴルの標榜する「生きた歴史学」に継受されたのである。

（B6判　三二六頁　一九七七年一二月　みすず書房　二〇〇〇円）

（阿河雄二郎　大阪外国語大学講師）